

報われなかった陰徳 — 銀行王 安田善次郎の誤算 —

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

財閥といえば三井、三菱、住友の三大財閥を想い浮かべるだろう。だが戦前は安田を含めて四大財閥と呼ばれていた。とくに安田財閥の金融資本は群を抜き、他の追随を許さなかった。みずほ銀行のルーツである安田銀行はその象徴だ。

一代で安田財閥を築き上げた安田善次郎(1838-1921)は銀行王と畏怖され、国家予算が16億円前後の時期に個人資産が2億円を超えるという空前絶後の大富豪に成り上がった。しかし世間の評判は芳しくなくケチの安田、金の亡者、守銭奴などと揶揄され、ついには非業の最期を遂げる。

安田につきまとった悪評は彼の分身といっている銀行に対する不信、不満、不安のあらわれでもあった。近代の黎明期に経済界の頂点を極めた安田は銀行の光と影も一身に背負っていた。

商人は武士より偉い

安田は富山藩の下級武士の家に幼名・岩次郎として生まれた。もともとは農業を営み、質素儉約に努めて小金を貯めた父が土分を買取った。

半農半士の生活で幼い頃から農作業を手伝い、寺子屋に通って算術を学ぶ。10代になると野菜や魚や切り花の行商をして家計を助けた。読書好きで写本の内職の際に『太閤記』を読んで豊臣秀吉のような天下人に出世したいと願うようになった。

本気で商人になりたいと思ったのは藩主の前田家に御用金を持参した大阪商人の姿を見たときだ。勘定奉行を筆頭に大勢の藩士たちが商人の乗った

駕籠を丁重に出迎えていた。安田は武士をも平伏させる商人の金の力に圧倒される。

20歳で念願の江戸に出て最初に玩具問屋、次に鱈節屋兼両替商の奉公人となった。両替商は現在の銀行の

ような役割を果たしていた。読み書き・そろばんに秀でていた安田は主人から重宝され、両替商の仕事を任せられるようになる。

6年後、こつこつと貯めた金を元手に独立し、日本橋人形町に両替商と海産物を商う安田屋を開店した。創業にあたって他人の力をあてにしない、嘘をつかない、支出を収入の10分の8にとどめ残りは貯蓄するなどの誓いを立てた。名前も善次郎に改名する。

誓いを忠実に守り、好きだった酒と煙草もやめ、毎朝4時に起きて懸命に働いた。2年後に日本橋小舟町に移転し、店名も安田商店として世間から大店と呼ばれる専門の両替商に成長した。

天下一のしまり屋に

明治維新を迎え、財政基盤の脆弱な新政府は現在の利付国債に相当する利子付き太政官札(金札)



安田善次郎

の発行に踏み切った。しかし額面割れの危険性があり、大半の両替商は引き受けに躊躇した。

当初の予想どおり金札は額面割れを引き起こし、押し下げの勢いは止まらなかった。ところが安田はやがて新政府の威信が確立され、額面割れ金札が正貨と等価交換される日が来ることを見通して大量に買いつづけた。

明治2年(1869)、金札を額面以下で取引することを禁止した正金金札等価通用布告が発令され、ついに額面引き換えて巨万の富を手にする。同時に新政府に協力したことで強固な信用を築いた。

明治5年(1872)、両替商の最高の地位である本両替の許可を取得。4年後には国立銀行条例の改正を受けて安田商店の向かい側に第三国立銀行を設立し、みずから頭取に就任する。当時は国の法律に基づいて民間が設立する銀行を国立銀行と称していた。

明治13年(1880)、安田商店を安田銀行に改組し、諸官庁の両替や金銀取扱いの御用達となる。豊富な資金で事業を拡張し、とくに北海道・釧路の硫黄鉱山開発では釧路港を海外への特別輸出港に指定させて莫大な利益を上げた。さらに不動産、保険、紡績などに手を伸ばし、全国に名を轟かす一大財閥を築いていく。

大富豪になっても勤儉貯蓄を信条とする安田の姿勢は変わらなかった。融資の際も事業の可能性を冷静に見極め、情感では決して金を貸さなかった。「意思の弱き人は友人知古のために保証人等となり、不測の災いを買うことあり。そのごとき一時の人情に駆られて自己の利害を顧みざる人は勤儉貯蓄を実行するあたわず」と。

銀行の経営者として当然のことを述べたと安田は思っていただろう。だが世間の眼は予想以上にきびしかった。私腹を肥やす「天下一のしまり屋」と皮肉られ、本所にある徳川御三卿の旧田安邸を買い取ると「なにごとも ひっくり返る世の中や田安の邸を安田めが買う」と戯れ歌で風刺された。

実際の安田はただの吝嗇家ではなく匿名で寄付を行っていた。麹町中学に土地を寄贈し、日比谷公会堂は安田の寄付金で建てられた。

匿名にしたのは父による陰徳の教えを守ったからだ。善行は名声を得るためでなく陰徳として人知れず実行しなければならないと信じていた。

だが陰徳の結末は余りにも無残なものだった。

凶刃に斃れたあとで

大正10年(1921)9月28日の早朝、神奈川県大磯町の別邸・寿楽庵で静養中の安田は新聞を読んでいた。82歳になっても矍鑠としていた。前日に引きつづき弁護士を名乗る若い男が面会に訪れ、いったんは断ったものの帰らないので会うことにした。書生に12畳の応接間へ案内させ、ふたりは籐椅子に座って向かいあった。家政婦がお茶とカステラを出して30分ほどたった午前9時20分頃、安田の悲鳴が聴こえてきた。

短刀で顔と右胸を斬りつけられた安田は逃げようとして縁側から庭に転げ落ち、喉を刺されて絶命した。男は応接間に戻り、自分も喉を刺して自殺する。

弁護士を騙った犯人の朝日平吾は凶行の理由を書き記した斬奸状を携えていた。「奸富安田善次郎巨富ヲ作スト雖モ富豪ノ責任ヲ果サズ。国家社会ヲ無視シ、貪欲卑劣ニシテ民衆ノ怨府タルヤ久シ」「由テ天誅ヲ加ヘ世ノ警メト為ス」と憂国の士を気取って自己を正当化していた。

世相は殺伐とした様相を呈していた。第1次世界大戦後の好景気が終息し、慢性不況といわれる暗い時代が到来する。前年3月の過剰生産恐慌で株価が暴落し、朝日自身も大損して怒りの矛先を探していた。銀行の信用は失墜し、預金者が払い戻しを求めて殺到する取り付け騒ぎも続出する。

貧富の差が拡大するなかで強大なメガバンクを擁する安田財閥は安泰だった。富を一手に集中しながら人情を嫌って自力の勤儉貯蓄を説く安田の姿は苦境に陥った民衆の眼に冷酷なエゴイストと映ったのかもしれない。

安田の死後、匿名を条件に東京帝国大学に講堂の建設費を寄付する計画書が発見された。長男の善之助は2代目善次郎を襲名し、父の遺志を受け継いで寄付を実行する。

大正14年(1925)、関東大震災による工事の中断を経て本郷に東京帝国大学大講堂が完成した。当初の条件どおり名前は伏せられていた。それでも安田の陰徳を偲び、学内ではいつしか安田講堂と呼ばれるようになった。